

## 「ジェニー」以後のシャトブリヤン

川 西 良 三

「キリスト教の眞髓」Génie du Christianisme の内容については、既に數多の權威ある批判が集中されてきてゐるので、これに附言することもない。その原本が一般に殆ど讀まれなくなつてゐる今日、我々にとつて興味のあるのは、むしろ、その時代的環境と歴史的意義とである。

一八〇二年に於けるナポレオン・ボナパルトは首席コンシユルの地位にあつた。當時のナポレオンは、慎重に大革命の成果の上に立脚し、帝國創始の野望を未だ表面には露呈してゐない。自由、民主の新理想より發し、あの狂瀾怒濤と流血の連續になつた大革命の時代から、フランスは如何にして突如ナポレオンの軍國主義帝國に移行したのであるか。その理由は、何人もが良く歴史的にこれを把握してゐるであらうか。その急激な政治上の變遷を、單にフランス國民の熱狂的性格にのみ歸してゐる歴史家もあるが、これは事實の全貌を傳へるものではない。その變化の根本理由として、我々は次のことを理解しなければならない。

まづ、十八世紀のフランス大革命は、その理想の急進的なるによつて、周邊諸國から大いに危險視されてゐた。當時の隣接諸國はすべて強固な王政組織に立つてゐたので、佛國民主革命の成立による自國內への影響を憂慮してやまなかつた。よつて、新思潮への對抗上、周邊諸國は聯合して、革命の成果を壓殺しようとする反動攻勢に出でざるを

得なかつたのである。かくて、危機に直面したフランスは、全歐の結集した壓力に對抗するため、國內的に堅い統一状態を招來し、對外的には強い武力對抗を以てしなければならなかつた。いはゆる「第三階級の革命」を成しとげた後のフランス共和國の立場は、革命の内容は異なるとしても、一九一七年十月革命以後のソヴェット聯邦の國際的立場と相似たものであることを思はなければならぬ。

フランスは、「恐怖政治」la Terreurの相つゞ肅清によつても、なほ内政の安固を得なかつた。この危急の秋に、佛國に強固なる國內的統一と對外的戦力とを與へたのはナポレオンの鐵腕であつた。フランス民族は、單に軍國の榮光にあこがれて帝政を承認したといふのではなかつた。右に述べたやうな現實的必要に迫られて、この冒險師の腕に國運を托したのである。

そこで、ナポレオンは、帝位につかんとする前夜に當り、國內の人心收らんのため内政上にも萬般の施策を怠らなかつた。その一つのあらはれは、一八〇一年ローマ法皇との間に結んだコンコルダ（宗教協約）である。これは翌一八〇二年に議會の承認を得て、四月十八日、折しもの復活祭を期して、おごそかに全國民に公布された。パリのノートル・ダム寺院では、首席コンシユル自ら出席し、莊嚴な禮拜の儀式が行はれた。思へば、「純理」Raisonの神を崇拜した大革命の嵐以來、十二年間全くその聲をひそめ、あるひはクラブに、あるひは食堂に革命集會所に、その他あらゆる世俗的用途に供されてゐたパリの全教會寺院から、この日、一せいに聖なる鐘の音が鳴りひびいたのであつた。ボナパルトの政治的狙ひは、僧侶らの聖壇上からの新政府に對する支持と、併せて人心の安定とを期待したところにあつた。宗教の復興は、革命政治の恐怖政治化に脅えおのゝいてゐた人心に多大の鎮靜作用を及ぼし、新政治を謳歌せしめる一つの理由となつた。

こゝに、「キリスト教の眞髓。別題、キリスト教の美的價值」の公刊されたのは一八〇二年、四月十四日である。すなはち、ノートル・ダム寺院に於いて莊嚴な儀式の行はれた日より四日前に當る。

この際、文學史上、特に注意すべきことは、シャトブリヤンが以後のローマン派の巨匠たちと異り、十八世紀の空氣を吸ふて育つてきてゐる點である。彼は一七八九年、革命勃發當時すでに二十一歳の青年であり、革命の經過を身近に眺めて年をとり、その後、第一帝國の運命をもその最後まで見届けてきてゐる。これは他のロマン派詩人、例へば、ヴィエー（一七九七年生）、ヴィクトル・ユーゴー（一八〇二年生）、ミュッセ（一八一〇年生）、テオフィール・ゴティエ（一八一一年生）等が、十八世紀と大革命とを直接には知らず、ナポレオン戰役の頃にもまだ殆ど物心のついてゐなかつたのと對比される。これを當今の表現によつて言へば、シャトブリヤンはアヴァン・ガールから成長し、他のローマン派詩人たちはアプレ・ガールであつたといふことになる。シャトブリヤンが十八・十九兩世紀の橋渡しであると言はれてゐる意味は、この信教復活の問題に關して特に重要さをもつのである。彼は、もと／＼、ブルターニュ地方の敬虔な信仰の雰圍氣の中に育つてきてゐる。従つて、この際、彼個人もまた追憶の宗教に立ちかへり、キリスト教の價値を、純粹の信仰的立場に於てのみならず、審美的觀點からも再認識しようとしたのであつた。もつとも、シャトブリヤンの改心の直接的な理由には、全く個人的な動機がかゝげられてゐる。英京に於ける亡命時代には、彼の生活は極めて亂脈の状態に陥つてゐた。公表されたエッセイ（「革命論」）の中には、極端に無神論的な思想が明らかに看取される。その昔の敬虔なプラティカンの少年がこのやうに變化してゐることを知つて、佛國內にゐる母人も姉たちも大いに心を痛めてゐた。ファルシー夫人たるジュリは、自らもまた餘命永からざるを豫感してゐたが、特に實弟に手紙を送り、「神に祈り、悔ひ改めよ」と勸告し、死期迫れる母人の切なる願ひを傳へてきた。手紙がシャトブリヤンの手もとに届いた頃には、この二人の肉親はすでに彼と幽明の境を異にしてゐた。この別離の痛切な悲しみがシャトブリヤンの改心を決定づけた。（一七九八年）

「墓より出たその二人の聲、死とは何ものであるかを解説してくれたこの體驗、それは私の心を震撼した。私は再びクリスチャンになつた。もちろん、それは高い宗教的探究によつて到達したものではない。この確信は心情から生

じた。私は泣き、そして信じた。J'ai pleuré et j'ai cru.] 云。

シャトブリヤンは若き日の數多い過誤をつぐなふことを念とし、さらに彼の文學に對する天職的欲求をそのまゝキリスト教信仰に結びつけることを志した。彼の歸依が、パスカルのやうな宗教的省察の徑路から進んだものでないことはその自認する通りである。

この心から著はされた大作「キリスト教の眞髓」は、カトリックのドグマに完全に合致することを目ざしたのではない。その趣旨はと言へば、ルネサンス以後の近代美學及び近代文藝が「キリスト教は人間性及び藝術美の壓殺である」と批難し、時にまた、十八世紀の純理的風潮が「宗教は中世的な暗愚迷妄である」と攻撃するのに對して、キリスト教を強く辯護するのが目的であつた。彼はまづ、キリスト教はむしろ人智の進歩に多大の貢獻をなし、美學的にもすぐれた建築様式や藝術を産み得たものであることを力説し證明しようとした。文藝の世界に於ても、キリスト教による練磨があることによつて人間の魂は一層美はしく且つ深くなり、宗教の關聯する人生的ドラマがより輝かしい光彩を帯びるものであることを主張した。そして、その一つの文學的證明としてまづ「アトラ」を以てし、次にはそれより數年をおいて「殉教者」を發表することになるのである。要するに、「ジェニー」は宗教の神學的證明ではなく側面的辯護であつたが、折しもの時代の歩みと一致したので、大きく世に浮かび上つた。この大冊も今日では特殊の研究者以外には讀まれず、その文學的生命は涸れてゐる。しかし、これが十九世紀ローマン主義美學への一の序曲となつた意義は没却され得ない。

この書物はもちろん小説ではない。多くの議論が連續してはゐるが「論文」といふ名も適當しない。彼の論據とするところはすべて文學的であり、全く感覺的理由に基づいてゐるからである。

次に、シャトブリヤンの問題作たる「ルネ」について考察してみよう。「ルネ」はもとく「キリスト教の眞髓」の中、第二部に組入れられてゐた挿話であり、「アトラ」の物語りと雙ぶものであつた。著者の言によれば、「アトラ」

は「キリスト教が大自然の風景や人間精神の諸情熱と諧音を奏し得ること」を證するために書かれ、他方、「ルネ」は「諸情熱の大波」の一章を飾る文學的例證たるべく書かれてゐる。「アトラ」の大成功は一世を風靡し、シャトブリヤンの聲名を天下に廣めたものであつたが、「ルネ」はその主人公の性格が異常に複雑であり、奇怪な陰影を含んでゐるので、「アトラ」のやうな華々しい大當りはしなかつた。然しながら、「ルネ」は十九世紀前葉の青年間に流行した「世紀病」の一典型としてゲーテの「ヴェルテル」にも比すべく、フランスローマン派の聖書たる位置を占めてゐる。「ルネ」の影響は、「アトラ」のそれよりも緩徐ではあつたが、かなり永い期間に亘つて續いたと言はれてゐる。「世紀病」*le mal du siècle*に關する診斷書もしくは病狀書と云ふべきものの系統には、年代順に言つて次の一聯の諸作品を擧げることができる。ルソーの「新エロイズ物語」(一七六一年)、ゲーテの「ヴェルテル」(一七七四年)、「ルネ」(ナツチェの稿から抜いたのよりみれば一七九三年頃の原作。公表は一八〇二年)、「セナンクルの「オーベルマン」(一八〇四年)等。

シャトブリヤンはルネの精神狀態を、「古代作家たちの知らなかつた、そしてまた、近代の文學者たちも充分にそれを研究してゐないものである」と論じてゐる。しかし、年代的にはヴェルテルあたりの方が舊いを見れば、シャトブリヤン自身、ドイツ文學界にあらはれたあの有名な書物を知らなかつたのかどうかは疑つてみるべき點がある。筆者は、多少の文獻を探してみたが、一七九〇年代にヴェルテルの佛譯があつたかどうか判然しないので、この點に關しては確言できない。

そもそも、シャトブリヤンなる文學者は、アメリカやギリシャや近東の風景を畫く際にも、自らの觀察によるよりも他の多くの作家から巧みに學び寫してゐることが多かつた。ルメートルの指摘するところによれば、シャトブリヤンは「最も多く借用した書物及び著者の名は特に秘匿し、差障はりのない名前だけを擧げる」といふ周到な技巧を用ひた人であつたといふ。したがつて、ルネとヴェルテルとの關係を究明することも容易ではない。それはとにかくと

して「ルネ」は、フランス語で書かれた「世紀病」診断書の最初のものであつたことが記憶さるべきである。

さて、わが國では例によつて字句の漢字的構成からその内容を速断する風があり、「世紀病」といへば、十九世紀の「世紀末的頹廢の現象」と混同視してゐる向きが多い。そこで、蛇足ながら、世紀病について一言説明しておきたい。

この物語りの主人公ルネは、人生に對して無限に數多い大きな欲望を抱いてゐる。しかしながら彼は、それらの希望を實現するまでに多くの障害が横たはつて居り、理想は容易に達せられぬものであることをも知つてゐる。もしも假りに、多くの困難を克服し願望の成就を計つたところで、得られる結果や對象は單に失望落膽を招くものに過ぎないと思つてゐる。よつて、ルネは行動不能の麻痺狀態に陥り、活動力も情熱をも失ひ、人生に倦怠し憂うつ念のみ昂するやうになつた。これがすなはち世紀病と名づけられるものである。

ルネはこの心の傷がますます深くなり、併せて罪惡的な情念の虜となり、ひたすら憂悶をつゞける。不安の念に驅られた彼は、心を轉ずるため歐洲各地周遊の旅にのぼつた。歸國してからも彼のその心は癒えず、つひに自殺をまで企てる。しかし、肉親のアメリーの思ひやりある慰撫によつて一たん思ひ止まつた。ところが、今度はそのアメリー自身が、また不可解な情念に襲はれ、自らの心の弱さに引きづられることのないやうにと修道院へ逃避することになる。この物語りの内容は以上のやうである。

ルネは、シャトブリヤンが作品中に創造した人物の中、もつとも彼自身に近いものであると言はれてゐる。後年に彼の自畫像たる「メモワール」が出るまでは、ルネはシャトブリヤンの異名をさへ構成してゐた。

ルネの倦怠憂悶といふものは多種多様の解釋を呼んでゐるのであつて、その心理的理由も俄かにこれと斷定することはできない。明瞭なことは、それが一つの時代的な心的狀態であることで、それ自體には分析的な定義はない。たゞ、「新エロイズ物語」や「オーベルマン」に比して「ルネ」の一特色とする點は、凡庸で平板無味な現實世界に對する誇り高い侮蔑の表明である。後年のローマン派諸家が市民的卑俗をさげすむのもこの感情の流れであると言へ

よう。そしてまた、ルネのその高ぶりは、シャトブリヤンの個性の一面をもそのまゝに映してゐる。

かく説いてくれば、「ルネ」が、キリスト教辯護の書たる「ジェニー」の一部を構成し得ない理由はすでに明らかであらう。よつて、一八〇五年にシャトブリヤンが「ルネ」を「ジェニー」の中から拔出し、これを全く別の物語りとして公刊するに至つた所以を我々は察知することができるのである。

我々は「ルネ」がフランス・ロマンティスムに及ぼした永い深い感化を知つてゐる。バンジャマン・コンスタンもヴィニーも、ミュッセも、その他多くの十九世紀作家は「ルネの子供たち」であると稱されてゐる。さらにまた、イギリスのバイロン卿も、このルネに感激し、また、「イティネレル」からヒントを得、この二冊より多くの形式や手法を學んで「チャイルド・ハロルド」を書いてゐることは多くの批評家に知られ、シャトブリヤン自身もそれを指摘してゐる。試みに、年代的な前後を考へてみれば、「チャイルド・ハロルドの巡禮」の第一歌篇、第二歌篇は一八一二年、すなはち、前述の二著冊の數年後に出てゐる。近東旅行そのものも、バイロン卿の方が約三年後れてゐる。ギリシャの政治的情勢に關しては當時までヨーロッパの人々は殆ど無關心であつた。古代ギリシャ文明の子孫たちが異教徒に抑壓迫害されてゐるのを見て、まづ悲憤の聲を發した點で、シャトブリヤンは全くの先驅者であつた。しかるに、後年のバイロン卿がこの先人の名を多く口にしなかつたのは、シャトブリヤンと同様に「多く借用した書物の著者の名を默殺する」といふ趣旨に發したものであらうか。因果はめぐると言はうか、シャトブリヤン自身も多くの著書から借用してきたが、今度は彼の方から「我々から最も多くのものを盗みながら、我々に最も多くの惡罵を返へす北の島國」と言はねばならぬ順となつた。

右に關し、レスキニールは次のごとく傳へてゐる。一八〇二年に英國ケンブリッジから G. Gordon, Lord Byron と署した長文の手紙がシャトブリヤンのもとに届けられた。しかし、當時の彼は「アトラ」によつて文名天下に揚がり、幸運の眞最中にあつた。よつて、無名の一外國少年からきた手紙のことなど直ぐに忘却し、全く返書しなかつ

た。そこで、英國の未來の文豪は、このことを大いに不快に思ひ、以後はシャトブリヤンの名を默するに至つたものであらうと。

「アタラ」「ルネ」の二挿話は、既述したやうに、キリスト教が人生を豊かにする文學的もしくは美學的效果のあることを例證しようとした創作であると稱されてゐる。しかし、こゝにあらはれたキリスト教の解釋はオーソドックスのものではない。むしろ、これは不安と苦惱とを掻き立て、諸々の人間感情を複雑深刻にする「嵐のキリスト教」を意味してゐる。人生に對する冷徹なる諦めや悟りを訓へ、人間的な多くの欲情を抑へさせ、簡素な道德の實行をすゝめ精神的安住を與へる宗教を指すのではない。宗教をこのやうに解釋するのも、一つには、彼の激情的性格の致すところであらう。彼によれば、一方に宗教の道德的制壓が加はることによつて、多くの人間的パッションはますます光彩を加へ、多くの人生的ドラマは文學的にいよゝゝ滋味豊かになるものであると。このやうな見解は、パスカルやボシユエやフェヌロンなどキリスト教界の多くのモラリストの説に合致しにくいものであるけれども、シャトブリヤンのな理解をする文學者をも我々は數多發見するのである。ボードレール然り、アンドレ・ジード然り、フランソワ・モリヤックの「人生ドラマ」の解釋然り。

さてまた、前回に述べたやうに、シャトブリヤンは、自然美の描寫に、ローカル・カラーの浮き出しに、多くは他の旅行者や地理學者の文獻を利用して引用するのが常であつた。彼自身の肉眼による觀察をば忠實に再現することは念としなかつた。しかしながら、彼はたゞ故國に安坐して、遠い異國の風景を空想的に構成したのではない。少くとも彼自身、初めにその地を踏んで全體としての實感を獲得してゐる。そしてなほ、足跡の及ばず知識の足らざる部分に對してのみ、他の文獻を利用吸収し、想像力を大いに働かせ、かなりの確かな描寫をしてゐるのである。さて、彼がアメリカ旅行によつて得た異色ある風景の知識は、その後は「アタラ」「ルネ」によつて存分に利用せられ、その源泉からはすでにそれ以上を汲むことができなくなつた。そこで、彼は次の文學の舞臺に新しい地方色（この語はフラン



スではシャトブリヤンが創始者であると傳へられる。la couleur locale)を登場させたいと思つた。今度は、視野を轉じ、イタリヤ、ギリシヤ、近東への旅行を企圖するやうになつた。一八〇六——一八〇七年にこの計畫が實行された。この旅行には従者案内人など數人を伴ひ、大金を用意し(當時の金で五萬フラン消費したと傳へられる)、一種の小規模な大名旅行であつた。もちろん、當時文壇に盛名變ぶ者のないシャトブリヤンとしては、このやうな時日勞力金錢の費消も次の大きな文學的成功によつて報ひられることは充分に確信してゐた。この旅行の性質は、後年のピエール・ロティのインド旅行とも似て居り、また、生涯に於ける時期こそ違へど、ジードのアフリカ旅行のそれとも相似たものがあつた。

近東旅行の計畫には一つの重要な構想が並行してゐた。先に、その著書「キリスト教の精神」で、彼はカトリック教の擁護者たる聲譽を獲得した。しかし、その著作「ジェニー」は、主として理論的主張に終始してゐる。アトラ・ルネの二挿話は存在したが、大著「ジェニー」の肉づけとするに足る程の規模の文學ではない。そこで、シャトブリヤンは、「ジェニー」の理論を文藝的に證明するに足る敘事詩的物語り「殉教者」を創作しようとした。

Les Martyrs「殉教者」の緒言にも、彼は明らかに次の二つの目的を掲げてゐる。まづ、「キリスト教が人間性格の發達に資し、諸々の情熱の發揮のためにも好適なる點、異教文明にまさること」を證し、「キリスト教に生じた驚異的現象、le merveilleux は古代神話にあらはれたそれにも劣らぬこと」を示さうと意圖するのであると述べてゐる。マルティールの起稿はジェニー發刊後わづかに數ヶ月であつたと言はれる。この二作品の密接な聯關をこゝにもうかゞふことができる。

マルティールは、時代としては古き異教文明と新しきキリスト教とが共存する第三世紀を選び、且つはまた、その舞臺をギリシヤ、イタリヤ、及び聖地エルサレムにおいた。三世紀ごろの史實は主としてベネディクト派の書物を精讀研究し、ラテン・ギリシヤの古代文明の地理は彼自らが踏破し把握することになつたのである。

このやうに周到な準備の上に仕組まれ、多大な勞作の上に打建てられた作品ではあつたが、その結果は必ずしも傑作の誕生を意味しなかつた。話の筋はといへば、人も知るごとく、ギリシャの一青年ユドールが妻シモドセとともにキリスト教の理想に殉じ、闘技場で獅子に食はれて死んでゆく物語りである。シャトブリヤンの構想は偉大であり劃期的であつたので、當時（一八〇九年）にはかなりの評判を生じたが、年とともにこの作品の包蔵する多くの弱點が論議され摘抉されるやうになつた。今日になつてみれば、マルテイルは彼の作品中もつとも色蒼ざめた不自然なものとて我々の眼に映ずるやうになつてゐる。筆者などもこれを讀み通すためにはかなりの辛棒を要した。一つのテーマを主張するために文學作品をつくるといふのは、詩人にとつて危険な試みである。彼は自分のつくつた粹の中に、詩人としての靈感を枯死させたことになつてゐる。

この書の内容を知ることのない一般に向つて、筆者はこゝで長々とその價值判斷を述べようとは思はない。たゞ、この作品が構想倒れに終つた文學史的結果を告げるにとゞめる。そしてまた、こゝでは、キリスト教の偉大さを顯揚するよりも、シャトブリヤン個人の文學的趣味が表面に押出されて居り、彼の初年の素養にひそんでゐる異教文明憧憬の心情が露呈してゐたといふ皮肉な事實を指摘すれば足る。

「パリより聖地ジェルザレムへの旅路」*Itinéraire de Paris à Jérusalem*（一八一一年）は「殉教者」の副産物と見なされるものであるが、むしろこの方が今日に至るまで多くの讀者を有してゐる。シャトブリヤンが大作マルテイルの準備のため、近東に旅行したことは先に述べたが、これを詳しく言へば次の如くである。一八〇六年七月にパリを出て、まづイタリーに赴く。次に、ヴェニスを経て海路アドリヤ海からギリシャに向ひ、アテネを訪れ、陸路スパルタを経て、古府に至る。それから以後、中途の行路は海運を利用し、パレナスチナ（聖地に着いたのは十月）、エジプト、カルタゴの故地を訪れ、いづれも内陸深くに旅行する。最後に海路スペインにもどり、一八〇七年六月パリに歸還する。その一年間の長々しい旅行記である。

紀行文といつても、シャトブリヤンの性格に鑑みるならば、それが無色に淡々と書きつゞられたものでないことは察するに難くないであらう。エドワール・シャンピオンは「従者ジュリヤンの日記」を集成して發表してゐる。主君シャトブリヤンの著述が英雄的で劇的要素に富んでゐるのに反して、従者ジュリヤンの手記は全く平凡で通俗な現實的推移のみ傳へてゐる。シャトブリヤンが異教徒を對手に勇敢に決然と振舞つたことを、従者は全く目撃しなかつたと言つてゐる。シャトブリヤンがその旅行記の處々を芝居がかつた演出と派手な着色とによつて塗りつけてゐることは或る程度否定できない。

しかし、前稿によつて明らかにした如く、そも／＼彼にとつての現實とは單に眼に映り耳にひゞいたもののみを指すのではない。また、彼にとつての行動とは、單に肉體的な動作や物理的な結果をのみ意味してゐない。空想により擴大され美化された風景もこの詩人にとつては現實の領域に入り、「斯くあるべし」と心勇んだことも彼の實生活の一部となつてゐる。

多くの批評家の意見はそれとして、まづ、原文の調子をよくかみしめて味はつてみよう。すこしでも英雄氣取りがあり、演説がかつたものがあり、悲壯がかつたものがあれば、これを嘲笑し攻撃し、通俗な現實にまで引き下げなければ氣が濟まぬといふのはフランス批評界の一つの傳統的傾向ではあるが、果してシャトブリヤンに誠實な表白がなかつたかどうか。偉なるスペルタの舊地點を探り當て、その地が草ぼう／＼たるを見て流した熱淚。峠を越え、眼下にひろがるアテネ平野を見、アクロポリスの丘にミネルヴの都（アテナ）を發見した時の感激。偉大なヘレニスム文明の後、いたるギリシャ人が武伐トルコの驅使の下に屬從してゐるのを眺めて洩らした悲憤慷慨の聲。聖地エルサレムを訪れたクリスチャンとしての至高な深い感動。各地に勢威を振るひ横暴を極めるイスラム教徒への強い憎しみ。エジプト・ナイル河をさかのぼり、太古數千年の歴史と人間數十年の短い生命とを思ひ合はせ、慨歎を久しくした記述。それらすべてが虚偽であり、芝居がかつてゐると何人が言ひ得るであらうか。すくなくとも筆者は、「筆の

妖術者」Enchanteur と呼ばれた彼の表現力を高く評價するとともに、その文章の感激あふるトーンにシャトブリヤンの感情の誠實さを汲みとる者である。彼の聲音が直接にひし／＼と我々の胸に迫るときを覚える節が多くあつた。

なほ、上記のもの以外に、彼の旅行記の中から感動的な部分を拾つてみよう。それによつて、ルメートル邊りの批評が如何に不正確で一面的であるかを知ることができると思ふ。

アドリア海を南下しギリシャに向ふ船の中で、嵐の近づく空模様を氣づかひつゝ、シャトブリヤンは舵手の傍らに立つて海原を眺めてゐた。その時、彼は、昔アメリカに向ふ船の中でも、嵐近づく海を見つめてゐる同一の状況のあつたことをふと思ひおこした。しかし、「私はその頃、まだ若かつた。（當時は二十三歳、今は三十八歳）波濤のとゞろき、大洋の靜寂にも心ときめき、嵐も、海礁も、多くの危険も、私の若い心にはすべて歡びの種であつたのに：」とて、今昔の感にふけつてゐる。中年になつた彼のしみ／＼した心境がそこににじみ出てゐる。

アテナに到着し、アクロポリスの丘からその舊き文明發祥の地を見渡した彼は、「萬物は移りかはり、この世ではすべてに終末ある」を今さらのやうに痛感し、「私の打眺めるこの景觀は、死してよりすでに二千年經つ人々の眼によつても打眺められてゐたのだ。そして、この私もまた、いづれはこの世を去るであらう。私と同じやうな、かない生命をもつた人間たちが、次々と、この同じ丘の廢墟に立つて、同じやうな思ひを繰返へすであらう。我々の生命も心も神の御手に握られてゐる。その生命も心も斯くは、かないものであるが故に、神の御意志にすべてを委ねよう。」と。

エジプトを訪れた後、シャトブリヤンは次の旅行先のチュニスに赴かうとして、アレクサンドリア港を十一月二十三日に發してゐる。その海上で荒天に遭ひ、シャトブリヤンの乗船は四十二日間の大難航をつゞけた。すなはち、出帆後旬日ならずして、船は全く航行力を失ひ、荒波強風の押し流すまゝに海上をたゞよひつゞけてゐた。西の烈風は船を逆に東へ押しやつて、ロード島が見えるまでになつた。「荒れ狂ふ海から眺めた陸地は、あたかも、まさに死な

んとする人間が見つめる人生と似てゐる。」と述懐してゐる。

やがて、強風は次に東南より吹きまくるやうになり、今度はマルタ島の近くまで押しやられたが、ノエル（クリスマス）の日には船はまたも海原の真中で激浪にもまれてゐた。暮れの二十八日には最も凄壯な暴風雨に見舞はれた。「もうこれまで」と思つたシャトブリヤンは、「一八〇六年十二月二十八日、聖地よりの歸途に遭難す。」としたゝめ署名した紙片を空壇の中に入れ、木栓で口をとぢた。船の沈没が切迫すれば、それを海上に流しやる覺悟でゐた。船は幾分傾斜し、激浪に甲板を洗はれつゝ、淺瀬に一週間停滞し、この状態で一八〇七年の元旦を迎えた。

「私が、喜びにふるふる胸を包みつゝ、両親の祝福と惠與の品を受けとつた、あの幼少の日は如何に遠い思ひ出となつたことか。あの頃、新年の元旦をどんなに待ちわびたことか。」と。

しかし、今シャトブリヤンは嵐の海上で元日を迎え、家族愛につゝまれる術もない。（彼は正妻とは半離別狀態にあり、終始、妻には冷たく、子なく、したがつて、その幼少時以外は家庭愛に恵まれることが全くなかつた。）この苦難の元日は、彼の額に苦惱の皺を刻み、頭に白髪の数を増すのみだとしきりに歎じてゐる。

一月六日、やうやくにして海は凪ぎ、十二日、彼はデュニスにたどりつくことになつた。あのやうに死に直面してゐたシャトブリヤンに、表現の芝居氣があつたとは信じ難いことである。

そもそも、シャトブリヤンはすでに前作「殉教者」の中で「文學との訣別」を考慮してゐた。その第二十四歌篇に於て、彼はミューズとの惜別を述べてゐる。

「文藝の神よ、私には文學のことは終つた。斯く心の堅琴を奏でるのも束の間、程なく私は御身の祭壇を離れる。もう口にはすまい、人の世の愛慾、惱ましい夢物語りなど。去りゆく若さとともに、詩の堅琴を捨てんのみ。」と。

アドリア海上の述懐にもあつたやうに、若さにあふれ、ひたすらに眼が前途を見つめてゐたアメリカ旅行の頃と、四十歳近くなつての近東旅行とは比較してみても興味深い。四十歳になつたシャトブリヤンに、若き日の「アタラ」の

やうな情熱の曲の奏されないことは言ふまでもない。あるひはまた、中年以後のシャトブリヤンには、掘り探るべき詩情の鑛脈が盡きてゐたかも知れぬ。四十歳から後の文章には、歴史や政治に對する關心の増大が見える。紙幅の關係もあり、三四の論文隨筆についてはこゝで論じないで、彼の晩年の唯一の大作たる、

「墓の彼方よりの回想録」Mémoires d'Outre-Tombe

についてのみ發刊の事情を説明してみよう。

その奇異な題名は如何にして生じたか。もと／＼、この書物は著者が、その四十三歳より七十三歳に至る（一八一—一八四一）まで三十年間、間斷なく筆を加へて成就してゐる。その内容に於て、彼が生涯に關係した多くの人々について言及してゐるので、さすがに諸方面に氣兼ねしなければならなかつた。よつて、著者の死後に公刊されることを特に希望し、さうなるつもりで「墓のかなたより」との題名を付してゐたのであつた。

晩年のシャトブリヤンは、この人生で幾多幸福の幻影を追ふことを最早斷念してゐた。殊に、政治的權勢への執着を捨て、以後のシャトブリヤンにとつて、文學的榮譽を守ることこそ、その唯一の願望であつた。最後の大著「メモワール」を公表するに當つても、彼はこのために充分な心づかひをしてゐた。

彼は嘗つて、コンコルド締結の時、フランスに於ける宗教復活の前夜を狙つて「ジエニー」を發刊し、大きな成功を収めた。よつて、この回想録に關しても、その發表の時期を豫め心に定めてゐた。すなはち、數十年に及ぶ文學的王座を維持しつゞけたシャトブリヤン彼自身が死去し、その直後、人々が今さらの如く感動と敬仰の念とを以てこの巨人をふりかへるであらうその劇的瞬間を狙つてメモワールを出すつもりであつた。彼は常に、すぐれた演出効果を考へてゐる人物であつた。

然るに、この名人藝も、わづかな錯誤からして、つひに實現しなかつた。この草稿を相當期間保持し焦心しつゞけてゐた書肆は、シャトブリヤンの死去するに先立ち、二月革命直後、早くもこれを公刊してしまつた。かくして、こ

れは題名にも背き、「墓のこちらからの回想録」になつてしまつた。すでに死期が接近し、身心の弱つてゐたシャトブリヤンにとつて、この手ちがひは大きな精神的打撃であつた。この書は多大な反響をまきおこし、直ちに多くの批判を呼ぶことになつた。

メモワールの内容は、主として政治社會に關するものであつた。文學との訣別を宣して以後、シャトブリヤンは政治的活動に没頭し、實際面に於てもかなりの足跡を残してゐる。昔彼はコンシユル時代のナポレオンに接近を計つたが、この風雲兒とはつひに合はなかつた。シャトブリヤンの政治的活動はブルボン王家の復辟後にあつた。外交上の要衝にあつた彼は、一八二三年、スペイン國內の革命に對するフランスの國家的干渉を主張し、出兵の事を進めた。これが外交上佛國の一つの成功であつたことは有名である。このやうに、彼はブルボン王家に忠勤をはげんだだけでも、その直後、にはかに王の不興を蒙り、ヴィレール卿との勢力争ひにも敗れ、外務大臣を辭し、報ひられること乏しくして、政界に雌伏をつづけた。戦争の責任は、それが敗れた時にのみ臣下の負ふものであつて、勝利となつた時は君主の功に歸するといふことを彼は知つた。不平不満やる方なきシャトブリヤンは當代の人々の不正を諷刺攻撃し、文筆による復讐の具としてメモワールを利用したのである。

スペイン革命に對する武力干渉によつても見られるやうに、彼の政治的役割はきはめて保守反動的であつた。さらにまた、宗教上の傾向に於ても復古的同顧的であつた。たゞ、文學上の暗示に於てのみ、シャトブリヤンは前向きであり、新時代とつながつてゐる。エミール・フアデによれば、彼はプレイアッド以來のフランス文學の進み方（すなはち、古典主義、それに次いで、冷たい擬古典主義）に終止符を打ち、全く新しい方向たるローマン主義に文學界を振り向けた。しかもまた、彼の當代及び後世の風俗への影響は著しく、「絶望、失意、憂愁、生存の倦怠、これらは彼以後文壇その他の一般的精神状態となり、心的習性となり、つひには上流社會全體の姿勢となつた。」と。

（ジェニー以前のシャトブリヤンに就いては、第三卷第五號の舊稿の末尾の方を参照されたい。）